

■朝比奈弥太郎(泰尚) 尊皇攘夷派が主流になった水戸藩で、執政を務め、“諸生派”の核になり、幕府のために最後まで戦った。

あさひなやたろう(やすひさ)

シボト事件・1828=

代々の今川氏家臣から徳川頼房の家臣に転じ、水戸藩誕生後、城代となり、光圀から弥太郎の名を与えられ、大老になって以後、**重臣として藩政を支え続けてきた朝比奈家泰然の次男に生まれる。**

シボト追放・1829=

1歳：徳川斉昭が9代藩主になって、重用された父泰然が、執政になり、斉昭の就藩の都度、將軍に拝謁して巻物を拝受するほどで、斉昭が自らの力を揮うべく重用した中・下士層とは別格の位置にあったが、

大塩平八郎乱1837= 9歳：

天保改革終・1844=16歳：幕府から致仕謹慎を命じられた斉昭は、父泰然に次第に不信感を抱くようになり、幕府老中阿部正弘宛て書簡に、“奸物”とまで認めるなか、**{弘道館}舎長を務める兄泰名が病身だったことから、**

阿部正弘首座1845=17歳：

孝明天皇・・・1846=18歳：

・・・1847=19歳：

北斎没・・・1849=21歳：

**朝比奈家の総領になり、小姓として出仕。**  
兄泰名が病没、その妻も死去して、遺された一子を養子に迎えるとともに、250石の小野角衛門家から妻を迎え、のち、三人の男子を得る。

ペリー来航・1853=25歳：

**家老だった父も死去。家督を継いで、1300石を賜り、水戸詰めになって直後、將軍継嗣問題で、大老井伊直弼と対立する斉昭が無断登城して、重罰を受けると、尊皇攘夷派が激しく抵抗し始め、**

安政大地震・1855=27歳：

この間、馬廻頭、書院番頭から、**大番頭へと出世。**

五ヶ国条約・1858=30歳：

尊攘派の活動が功を奏して、朝廷から幕政改革を求める勅書が下されると、幕府は、“安政の大獄”開始とともに、勅書の返納を厳命、藩内が分裂するなか、返納を決定、尊攘派は長岡宿に屯集して拒み続け、

桜田門外変・1860=32歳：

**\*斉昭の親書によって尊攘派を説得すべく、家老鳥居瀬兵衛に随行して長岡に出張、途中、両者は衝突、激派の処分について、藩庁が、即時武力鎮圧派とあくまで説諭派に分裂するなか、現実的意見を述べるが、斉昭が鎮圧命を出したことで、返納阻止派は、井伊大老を暗殺した“桜田門外の変”を起こすに至る。**

遣欧使節・・・1861=33歳：

**大寄合頭になり、幕府の要請で、藩内取締掛を命じられるなか、尊攘派がイギリス仮公使館の品川東禅寺を襲撃、幕府で、激派と対峙することになる。**

生麦事件・・・1862=34歳：

**斉昭が死去、幕府から従二位権大納言が追贈され、後を継いだ藩主慶篤の命で、謝恩のため上洛し、**

8月18日政変 1863=35歳：

**\*帰藩後、城代に進む。まさに、幕府と藩双方から信望を得た栄光の時を迎えるも東の間、**

禁門の変・・・1864=36歳：

**\*激派が筑波山で挙兵、“天狗党の乱”が始まると、{弘道館}で学ぶ諸生らは会盟して、激派の鎮圧を藩に建言、その“諸生派”と行動をともにすることになる。大寄合上座用達に進み、役料300石を賜って、市川弘美、佐藤信近と並ぶ最高位の執政になり、前執政らは謹慎処分。將軍家茂の慶篤への親諭によって、天狗勢の鎮圧を命じられ感激するも東の間、水戸の執政榊原新左衛門ら尊攘派の意見を受け入れた慶篤により、一転、罷免され謹慎を命じられる。佐藤とともに、出陣していて処分を免れた市川と三者で、水戸城を拠点に再起を図り、天狗勢を敗走させるも、鎮静すべく慶篤の名代として水戸に下った支藩宍戸藩主松平頼徳に従ったのは榊原ら尊攘派で、途中、合流した者で膨れ上がり、彼らと本格的な戦闘になってしまうが、幕府による援軍によって勝利し、頼徳は切腹、その他は多くは投降、武田ら天狗勢は袂を分かって戦闘を続ける。**

薩摩藩士密航1865=37歳：

首謀とされた榊原らは切腹。京をめざした武田ら天狗勢も、金沢藩に降伏し、

薩長同盟・・・1866=38歳：

処刑される。母方の養家では、榊原らと行動をともにした若き当主が切腹になる。**反対派への厳しい処分**に対して、市川、佐藤とともに、破格の加増をされるなど極端な政策が、幕府の介入を招いて、

大政奉還・・・1867=39歳：

**免職となり、一時、謹慎処分。大政奉還で、時代は一気に変わり、京都にいた水戸藩尊攘派は「除奸反正」の勅書を得て再起、“奸”の一人とされるも、尊攘派からも、藩主慶篤からも一目を置かれていたが、**

明治維新・・・1868=40歳：

**\*戊辰戦争が始まると、佐幕派の雄・会津藩をめざす“諸生派”と行動をともにし、会津側の要望で、全員、水戸藩士と分からぬように変名、越後に向かう。藩主慶篤の死去も知らず、転戦するうち、長岡城が落城して、会津に退却、戦う敵方の新政府軍には水戸の追討軍もいたことから、“諸生派”の存在を知られると、水戸城の奪還をめざし、新選組や長岡藩兵などとも合流して、何とか水戸に着くが、城に入らず、{弘道館}を占拠するが、総攻撃を受けて、下総国方面に敗走、援軍は皆高崎藩に投降して、残った“諸生派”のみで、なお戦い続けたが、松山村(現在の匝瑳市内)の戦いで全滅、朝比奈家最後の弥太郎として、没した。**